

名古屋柳城短期大学
第 5 回東日本大震災復興支援
ボランティア活動報告書
2015 年度



協力：被災者支援センターしんち／ふじ幼稚園

目 次

第5回 東日本大震災復興支援ボランティア活動について	1
2015 年度 東日本大震災復興支援ボランティアに参加して	2
現地活動プログラム	3
写真で綴る 2015 年ボランティア	4
参加者の感想	7
チーム・パティシエ	22
あとがき	23

種蒔き

柳城学院創設者

マーガレット・ヤング

翼ひろげた天使が

愛と心理と光明との

種子をひと粒手に持って

飛ぶのを止めて考えた。

「これが大きくなったなら、

すばらしい実になるように、

どこへ蒔いたらよいのだろう」

救い主さま、それを聞いて、

にっこりわらっておっしゃった。

「私のために その種子を

子どもの心に蒔いておくれ」

第5回 東日本大震災復興支援ボランティア活動について

キリスト教センター 村田 康常

東日本大震災から5年の歳月が経過しました。ささやかな支援活動が続けてきた私たちは、あの震災が「時代の転換期」を象徴するものだったという思いを次第に強めてきました。被災地以外の場所で急速に進む震災の記憶の風化と忘却、長引く避難生活、その原因となっている放射能に汚染された広大な故郷の土地、そして、未来の世代にも大きな大きな負の遺産を残すことになった原発事故が突き付けた私たちの社会の決定的な弱点と矛盾……。支援活動を通じて、私たちは、大きな社会的課題とも否応なしに向き合うことになってきました。

そのような深刻な問題の中にあっても、支援活動が続けている本学のボランティア学生たちは途方に暮れることもなく、まっすぐに被災地の方々とつながるような活動を丁寧に、楽しみながら、自分たちのできる範囲で行っていきこうという姿勢を失いませんでした。学生たちの明るく誠実な姿勢と、被災地の方々の語ってくださる言葉に深く心を動かされる様子を見るたびに、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」という聖書の言葉が思い出されます（新約聖書「ローマの信徒への手紙」12章15節）。社会の中で小さくされた人たちのもとに行き、そこに留まって、交わりを深めなさい、と聖書は呼びかけているのだと思います。被災地支援の活動を主体的に続けているボランティア学生たちのなかに、この呼びかけにもっとも素直に応答している姿を見ることができるよう感じます。こうして交わりが深められていくということが、平和を実現するということにつながっていくのかもしれない。

このようにして、2015年度も名古屋柳城短期大学キリスト教センターでは、ボランティア学生と教職員による被災地支援と交流の活動を行ってきました。活動を継続するには、さまざまな困難がありましたが、その一つ一つに直面するたびに、思いがけない支えや励ましが与えられて、私たちの歩みを強めてくれました。

今年度の現地での支援活動は8月17日から20日まで16名の学生と5名の教員によって実施されました。この16名のボランティア学生たちは、短期大学特有の過密なスケジュールの中で事前準備と学習会を繰り返し、現地に行くことができなかった多くの希望者の思いも抱えて現地に向かいました。その4日間の活動が、どれほど多くの恵みと問題提起を与えてくれたかが、この報告書に綴られた一人一人の言葉に表れています。学生たちは被災地での活動を振り返って、これまで見ていなかったものが見えはじめた、と話していました。被災地以外の場所で生活する者には気づきにくい、重い現実があるということ、そして、現実をこのように重くさせている大きな社会的課題があるということに、私たちは肌で直接触れるようにして、気づかされました。そのような現実の重い課題を実感しながら、学生たちは仮設住宅で暮らす子どもたちと文字通り全身全霊で遊び、茶話会に集う方々の言葉に耳を傾け、震災を経験した幼稚園と保育園の先生方から子どもの命を守るという保育者の仕事の大切さを学びました。

被災地を訪れる現地活動とともに、本学の被災地支援活動の2本柱となっているのが、学内で続けられている「チーム・パティシエ」の活動です。「チーム・パティシエ」のメンバーたちは、毎月、第2水曜日に福島県新地町のがん小屋仮設住宅で開かれる水曜喫茶「ほっとコーナー」に出すためのケーキを作っています。この活動がはじまって3年目になりますが、これまで一度も途切れることなく続けられてきました。「チーム・パティシエ」の中心メンバーは、昨年度の被災地でのボランティア活動に参加した学生たちと、今年度の被災地での活動を行った学生たち、そして、現地活動に応募したけれども人数制限のために被災地に行くことができなかった学生たちでした。現地訪問で経験した仮設住宅での茶話会の様子を語り合いながらケーキを焼き、茶話会に来られる方々への手書きのメッセージを添えて、支援拠点である「支援センターしんち・がん小屋」に送っています。保育科のボランティア学生たちが幼稚園や保育園での実習のために活動ができなくなったときには、専攻科介護福祉専攻のみなさんが代わりにケーキを焼いてくれました。

夏には、正門の横の花壇で「ふじ幼稚園」でいただいたひまわりの種から育てられた小型ひまわり「ビッグスマイル」の花が咲きました。発芽から開花、種の収穫まで毎日世話をしてくれたのは、山本聡子先生と山本ゼミの学生たちです。今年度は、名古屋短期大学の被災地支援サークル「みんなに笑顔をとどけ隊」のみなさんからいただいた、宮城県石巻市の大川小学校にちなむひまわりの種も一緒に育てて、見事な花を咲かせました。

秋に開かれる「柳城祭」では、がん小屋仮設住宅の「莓一笑」の方々が手づくりされた「いちごのストラップ」の販売と募金活動を行いました。今年度は、「いちごストラップ」と同じブースで、「チーム・パティシエ」が手作りのクッキーを販売して売り上げを被災地に送りました。また、ボランティアサークルによる岩手県の「復興ぞうきん」の販売も行われて、柳城祭のキリスト教センターのブースは、多くの学生が集まって複数の線から被災地支援活動を行う場となりました。

まさに、複数の線から力を貸して下さる方が現れる、ということが、本学キリスト教センターの被災地復興支援の活動の一番大きな支えです。被災地の方々のために何かをしたいというボランティア学生たちの熱意が実現されるために、ほんとうに多くの方が力を貸してくださいました。すべての方のお名前を挙げて感謝をお伝えしたいところですが、特に、2015年5月末をもって閉じられた「被災者支援センターしんち」と、その働きを引き継がれた「支援センターしんち・がらん小屋」の松本普さんと高木栄子さん、水曜喫茶のママ・加藤和子さんと三宅友子さん、日本聖公会中部教区センター、日本聖公会東北教区の皆さまには、今年度も引き続いて、多大なご支援とご協力をいただきました。今年度の現地活動は、昨年度、一昨年度に引き続いて、「メリット基金」による助成という大きな恩恵を受けて実現されました。感謝いたします。

ここに挙げることができた方々以外にも、この被災地支援活動を通じて、私たちは、支援しているはずの自分たちがかえって支援されているということを実感するような、ほんとうに多くの支えや心からの励ましを受けて、活動を継続することができました。深く感謝いたします。

2015年度 東日本大震災復興支援ボランティアに参加して

山本 聡子（本学教員）

2011年3月11日14時46分。預かり保育の子ら10数名を残し、ほとんどの子どもはお迎えの保護者とともに帰宅。静かになった園舎・園庭周りの清掃を教員で手分けして済ませ、ほっと一息つき立ち話に花を咲かせていた時でした。「あれ？なんか揺れてません？」と一人が気づき「揺れたかな？」などと言いつつ合っていると、預かり当番の教員が「今地震がありましたよね」と階段を上ってきました。おやつの時間で席についていたため、立っていた私たちより揺れを感じたようです。幸い子どもたちは、特に不安がることもなく遊んでいるとのこと。誰からともなく職員室に戻り、地震速報などをチェックするうち、徐々に明らかになってゆく甚大な被害状況を息を飲み見守っていました。

年3回、学期ごとに行われる園の避難訓練。火災、震災、建物倒壊など様々なシチュエーションを想定して行いますが、20数名の園児を大人一人で導かなくてはならないのです。何度訓練を重ねても、「本当に災害が起こったら、私は子どもを一人残らず守ることができるだろうか」という不安を抱いていたところに、3.11の大震災で、改めて保育者の責任の重さを突き付けられたのでした。

ボランティア1日目の被災地巡礼で、私たちは津波被害で園児と職員が犠牲となったふじ幼稚園の旧園舎を訪れました。

あの日のふじ幼稚園の14時46分も、降園時間を迎えて園には51名の子どもが残っていたそうです。「地震が起きたらまず室内の落下物から頭を守る」「揺れが収まったら建物から出る」これは避難訓練で推奨される避難の手順です。ふじ幼稚園でも建物内には危険ないと、園庭の園バス2台に子どもたちを分乗させました。そこを津波が襲ったのです。

子どもたちと先生方は、バスごと冷たい濁流に流されました。

今も裁判の証拠としてそのまま残さざるを得ないという旧園舎の外壁には、津波の跡が見えました。しかしその跡の高さからすると、園舎から出ないで2階に上がっていれば津波に飲まれることはなかったのではという疑問が湧きました。「確かにその点は遺族側からも指摘されている、しかしそれは後からだから言えることで、当時はわからなかったから」とのことでした。はっきりした情報の届かない中で、先生方は、その時その時に最善の策を選択し、できることを全て必死の思いでやりきったことと思います。それでも、守れない命があったのです。

日は暮れかけて雨脚も強くなる中で、案内してくださる松本さんのお話を聞きながら、学生たちが涙を流しているのが見えました。「保育は、子どもの命を預かる仕事だ」とはよく言われることですが、津波の跡の残る園舎を見て、本当に、子ども一人一人の命に関わる判断を一瞬で下さなくてはならない仕事を自分たちは目指しているのだと、実感したのではないかと思います。

ふじ幼稚園で命を落とした園児の保護者の方が、2度とこのような悲しいことがないように、と安全・防災を呼びかけておられます。今回、松本さんも、「忘れないでほしい、広めてほしい」と繰り返しおっしゃっていました。私は、今回貴重な体験をした学生たちに、あの場で感じた気持ちを忘れない保育者になってほしいと願っていますし、私自身も、出会った人に被災地で学んだことを伝え広めていきたいと考えています。私たちのボランティアとしての役目は、むしろこれからが本番なのかもしれません。

東日本大震災 復興支援ボランティア 2015 現地活動 日程

	8月17日(月)	8月18日(火)	8月19日(水)	8月20日(木)	
	センターしんち・がん小屋 被災地巡礼	がん小屋 遊ぼう会・宿題やろう会	がん小屋 茶話会・夏祭り	ふじ幼稚園・ 新地保育所・福田保育所	
6:00					
7:00		朝食	朝食	朝食 帰宅準備	
8:00	07:30～08:00 集合(昼食 持参)【名古屋駅銀の時計】		がん小屋仮設住宅へ移動 昼食準備	3園へ移動 保育準備	8:00
9:00	名古屋駅発(8:40)	がん小屋仮設住宅へ移動	【水曜喫茶・夏祭り準備】 がん小屋仮設住宅		9:00
10:00	のぞみ300号	【遊ぼう会・宿題やろう会】 午前 がん小屋仮設住宅		【保育参加】	10:00
11:00	東京駅着(10:20) 東京駅発(10:36)		【水曜喫茶】 がん小屋仮設 住宅集会所 レクリエーション ミニコンサート等	①ふじ幼稚園9:30-13:00 ②新地保育所10:00-12:30 ③福田保育所10:00-12:30	11:00
12:00	昼食(車中)			昼食 (②③は園児と一緒に)	12:00
13:00	やまびこ47号	【昼食】	【昼食】	保育参加と昼食の片づけ	13:00
14:00	仙台駅着(12:37) レンタカー手続き	19日の茶話会・夏祭り の準備と買い出し	夏祭り準備	移動 山元I.C.前集合(13:30)	14:00
15:00	新地着	【遊ぼう会・宿題やろう会】 午後 がん小屋仮設住宅	【夏祭り】 ・がん小屋仮設 住宅集会所 ・同駐車場 ・支援センターし んち・がん小屋	仙台駅へ移動	15:00
16:00	センターしんち・がん小屋 【オリエンテーション】			駅周辺で自由時間 (夕食買出し)	16:00
17:00	【被災地巡礼】 センタースタッフ の案内で新地町・山元 町の被災地を巡ります			仙台駅発(16:30)	17:00
18:00	宿へ移動 チェックイン	19日の茶話会・夏祭り の準備	夏祭り片づけ	はやぶさ24号	18:00
19:00	夕食	夕食	花火大会準備	東京駅着(18:04) 東京駅発(18:20)	19:00
20:00	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想	【花火大会】 がん小屋仮設住宅	夕食(車中) のぞみ249号	20:00
21:00	夏祭り準備	夏祭り準備	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想 帰宅準備	名古屋駅着(20:01) 解散(20:15)	21:00
宿泊	旅館かんのや	旅館かんのや	旅館かんのや		宿泊

写真で綴る

2015 年度



東日本大震災復興支援ボランティア



がん小屋にて①



がん小屋にて②
オリエンテーション



がん小屋にて③
遊ぼう会



夏祭り①



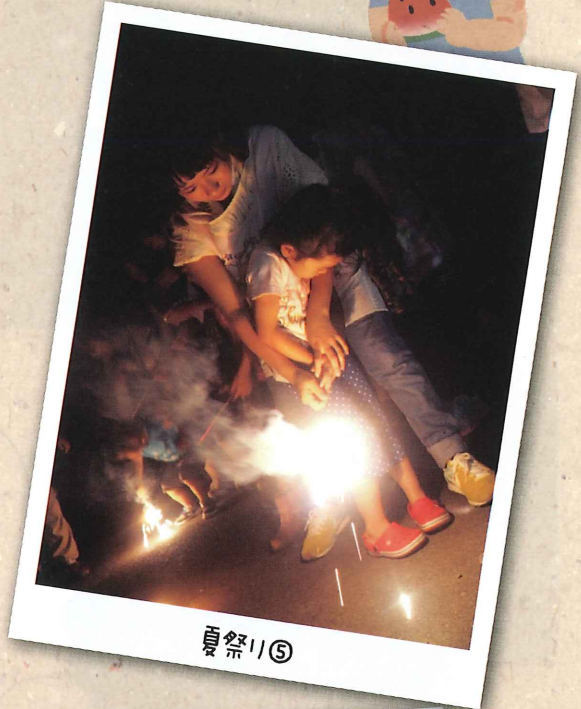
夏祭り②



夏祭り③



夏祭り④



夏祭り⑤



旧ふじ幼稚園



新地保育所



保育参加①
ふじ幼稚園



保育参加②
福田保育所



1日目 巡礼

被災した場所を実際に見てきました。案内してくださったのは、松本普さんです。



毎日の放射線
量を測る器具

保育園に設置されているものです

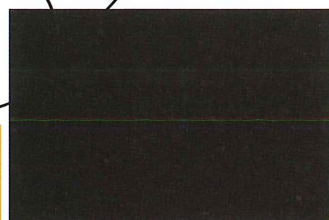


2日目、3日目 がん小屋

仮設住宅の子どもたちと全力で遊んだり、茶話会でお年寄りの方と触れ合ったりしました。



福島は星空は綺麗でした



保育園



4日目

保育所訪問

幼稚園1園、保育園2園に分かれて、震災当時のお話を伺い、子どもたちと活動しました。

幼稚園



4日間という短い時間でしたが、現地を訪れて交流を深め、お話を伺ったことで、今まで見えなかったことが見えてきました。この活動を通して学んだことをそれぞれの言葉で伝えていかなければと思います。

ボランティアを振り返って

学籍番号：26B17 氏名：神戸 祐希奈

わたしは今年も東北ボランティアに参加させていただきました。

今年は去年の先輩の姿を拝見し、ボランティアのリーダーとして、また違う角度から参加させてもらいました。この4日間で、私は当たり前の大切さを学びました。その中でも、私が一番思い出に残っている事を話したいと思います。

今年は去年と同様に、がん小屋仮設住宅に行くことができました。子どもの数は減り、去年いたことが何人も引っ越していました。「引っ越す」ことは「新しい家が決まる」ということ、とても良いことではあるのですが、会えなかったのはとても悲しかったです。子どもたちと一緒にたくさん遊び、お祭りをし、花火をしました。

去年よりも、関わりも深く、とても仲良くなれた気がします。

その中でも、がん小屋での思い出は、去年もいた男の子と女の子の兄妹です。お兄さんはがん小屋の子どもたちのリーダーでみんなから頼られる存在でした。妹はいつもお兄さんの背中を追いかけていました。そんな妹が私に花火をしているとき「引っ越しが決まったよ」と、言ってくれました。私はとても嬉しかったです。この子たちがやっと、自分の空間、家族の憩いの場ができる、と思うと、嬉しくて涙が出てきました。その反面、もう会えない悲しさやこの子たちが受けてきた辛い思い出がどれだけ心に残っているのか考えると涙が止まりませんでした。

私が思っているよりも、被害を受けた子どもたちは強く、元気に振舞っています。震災から4年経った今でも、家族の遺体が見つからなかったり、家が見つからなかったり、決して復興はしていません。見た目や形はどうとでもなります。でも、子どもや大人、年齢性別関係なく、心の傷はどう癒しても、消えないんだと深く感じました。私たちにとって、大事なこと、それは「当たり前があること」だと思いました。家に帰ると「おかえり」と、声が聞こえること、学校に行けば「みんな」がいること、当たり前が当たり前じゃなくなるというのは、想像もつかず、とても辛いことです。私にとって、今の生活がどれだけ幸せで、満たされているか改めて感じました。そして、私は、保育者になるという夢を叶える上で、これから大きな地震があったときに、子どもたちの心をケアできるような人になりたいと思いました。とても難しい事です。でも、親身になって話を聞くだけでも、それはケアになります。言葉が通じない乳児であっても、抱きしめるだけで安心する、それもケアです。私にできる事、小さな事でも、それでも、子どもたち、一人でも多くの人が気持ちが楽になるなら、していきたいと思います。

2年間行ったからこそ、言える事でもあるとおもいます。1年目より2年目は本当に本当に泣いたり笑ったり喜怒哀楽のすべてが詰まった4日間でした。

少しでも早く東日本の被害にあった人たちが、心から笑えますように。

ボランティアを通し学び決意したこと

学籍番号：26B18 氏名：木戸 捺乃

昨年、今年と2年連続で東日本大震災復興ボランティアに行かせていただきました。2011年3月11日に大震災をテレビで目撃した時は言葉に表せないくらい驚き、自然の怖さを実感しました。被災が起きてからずっと私にはなにかできないのか、被災地に実際に行って現状を確かめ、なにか被災者の方のためになることはできないか、高校生の頃ずっと考えていました。短大に入学して

からこのボランティアがあることを知り真っ先に申し出ました。今年も行かせていただいたことで昨年では学べなかった多くのことの学びを深めることができました。

初日の被災地巡礼では昨年と同じ場所に行きましたが、特に海岸の方は昨年よりだいぶ復興が進んでおり、一年でこれだけの復興が進んだということとまだまだ復興が必要だということを実感しました。

ふじ幼稚園での被災時の出来事は昨年と同様のお話を聞かせていただきましたが、保育者を目指す私たちにとって本当に考えさせられることだと思いますし、この事実を私たちから周りの人たちへ発信していかなければいけないことを改めて深く受け止めました。

2、3日目にはがん小屋という仮設住宅へ行き、茶話会に参加させていただき被災に遭われた高齢者の方と関わることができました。そこでは涙を流しながらも私たちのために被災の経験をお話ししてくださり、その中からは人の温かさや協力することの大切さを学ぶことができました。

またがん小屋には去年も行かせていただきましたが、今年は去年よりも子どもたちの数が大幅に減っており、話を伺うと「新居が建てられ仮設住宅を出て家族と暮らしていますよ」と教えてくれました。それを知っているまだ仮設住宅に残っている子どもたちの中には「私も早く家に戻りたい」と訴える子どもも居ました。遊びの中ではわからない子どもたちの苦しみを知り、胸が痛くなりました。そんな子どもたちの心からの笑顔を見たい一心で3日目には夏祭りを企画していきました。この夏祭りでは子どもたちの笑顔がキラキラ輝いていて、「楽

しい！」と言って喜んでくれてたくさんの笑顔が溢れていました。この経験から私は保育者になって子どもたちの笑顔を守らなければいけないんだという責任感と私が関わる全ての子どもたちを必ず幸せにしてみせると誓いました。

私たちは被災に遭っていないから日常生活の中で同じ日本の中で東日本大震災が起こったということを忘れてしまうが、被災に遭われた方は今もこれから先も被災時の出来事がフラッシュバックとして蘇る。東海大震災がいつ起きてもおかしくないと言われている中で本当に他人事ではない、子どもたちを守らなければならない保育者である私たちは特に東日本大震災を深く受け止めなければならない、そして起こった時のことを考え、どう対応するべきか等、被災に備えておかなければならないんだと痛いほど実感しました。

だからこそ私は2011年3月11日に起きた東日本大震災でどれだけの人が亡くなりどれだけの人がまだ見つかっていないのか、そして今どれだけの人が苦しんでいるのかということをこれから先、月日が経ったとしても絶対に忘れてはいけない。このことを改めて命の尊さとともに胸に刻み生きていこうと決意しました。

この経験を糧にして

学籍番号：26B44 氏名：宮部 夏実

私は8月17日から8月20日にかけて東日本大震災復興支援ボランティアに参加しました。

ボランティア報告会を聞き、2年生になって参加できるチャンスがあるのならば、ぜひ参加してみたいと思いました。

東日本大震災が起きた日は、私が中学を卒業して数日後でした。地震が起きたとき、私は自宅で過ごしていました。テレビをつけると、地震後、津波が起きている様子が映りました。

次の日の新聞には、地震のことが写真と一緒に記されていました。新聞の記事の中に日本地図を使って、死者、行方不明者を表した一面がありました。私は、そこから自然災害の恐ろしさを知りました。

ボランティア活動1日目は、実際に被災した場所へ行き、巡礼を行いました。巡礼をした場所で話を聞くと、その時の様子が頭の中で想像できました。何もなかった

ように思わせる目の前に見える海があの日はこの町をのみ込んだのだという現実が私に向けられました。少しずつ復興している様子を見ましたが、まだまだ完全に復興するには多くの時間がかかることが伝わってきました。

2日目は、がん小屋仮設住宅に住む子どもと遊んだり、夏祭りの準備をしたりしました。

私は野球が好きな小学生の男の子と一緒に野球をして遊びました。野球をしている時に楽しむ男の子の笑顔がとても嬉しかったです。

一緒に遊んだ後に、夏休みの自由研究の相談を私にしてくれました。そして、私が柳城の先生にそのことを話すと、先生は男の子に話しかけ、2人で相談して「プロ野球選手のひみつ」という題名で自由研究の宿題と一緒に始めました。その自由研究は、次の日に完成しました。

私とその男の子と一緒に野球をして、男の子が私に

話しかけてきてくれたことが、この自由研究をするきっかけになったと思うと、交流を深めることは大切だと思います。

3日目の午前中は茶話会で集まった方と歌と一緒に歌ったり、話を聞いたりしました。

歌を歌っているとき、胸が熱くなり、涙がこぼれてしまいました。茶話会の様子を見て、震災が起きる前から地域の方々の交流が深かったことも感じることができました。

午後から行った夏祭りでは、学生と一緒に楽しみながら、ヨーヨー作りやスイカ割りをする姿がありました。夏祭りで楽しむ様子を見て、今まで準備をしてきて

良かったなと思いました。

4日目は、新地保育所へ行き、シャボン玉遊びをしたり、先生方と一緒に子どもたちの前でダンスをして子どもの誕生日会に参加したりしました。新地保育所へ行き、さらに保育者になりたいという気持ちが強くなりました。

4日間のボランティア活動を通して学んだことは私にとってかけがえのないものになりました。このボランティア活動の経験から、世界で起きている様々な出来事にも目を向け、社会人になっても、ボランティア活動に参加できる機会があれば、参加したいと思いました。

ボランティアを振り返って

学籍番号：26C25 氏名：下村 美穂

私が今回このボランティアに参加した理由は、2つありました。それは、震災から4年たった現状をみること。そして、私自身震災のことを遠い昔のことのように感じている部分があり、今回のボランティアを通して、もう一度被災地のことを考えるきっかけにしたいと思ったからです。

実際に被災地に行ってみると、当時の被害が、いかに大きなものだったかが伺えました。曲がった道路標識があったり、津波が来たあとがまだ残っていたりと、当時の悲惨さを目で見て知りました。

4日間のボランティアの中で最も印象に残っているのは、4日目の福田保育所での活動です。主活動として、シャボン玉遊びを子どもたちと楽しみました。

福田保育所に着くと、まず、園長先生が震災当時の様子や、現状についてお話してくださいました。また、先生方全員が、“福田魂”と背中に大きく書かれたTシャツを着て迎えてくださいました。私たちのようなボランティアが来たときは、みんなでおそろいのこのTシャツを着るそうです。先生方の強い絆を感じました。

福田保育所の隣には小学校があり、その小学校と連携しながら震災を乗り越えて来られたそうです。震災後は、合同で避難訓練を行っているとおっしゃっていました。また、福田保育所は、地域とのつながりをとても大切にされていて、震災以前からも、地域の方が自分で育てた野菜などを持ってきてくれて、それをその日の給食

として提供することがよくあったそうです。震災後もそれは変わりませんが、1つ変わったことは、必ず放射線量を測定してから給食として提供するかを決めるということです。園庭には、空気中の放射線量を測定する機械がありました。また、子どもたちが園庭に出るときには、必ず着替えを用意し、保育室に戻る前に着替えていました。保育室内に放射能を持ち込まないようにするためです。放射線量は、基準をクリアしてはいますが、放射能への対策は徹底していました。

主活動のシャボン玉遊びでは、ストローで吹くものと、内輪の枠を使って遊ぶものを用意しました。特に、内輪が人気で、内輪を持って走るとシャボン玉が出来るということを発見し、みんなでかけっこが始まりました。たくさんのシャボン玉に囲まれながら笑顔で走っている子どもたちの姿をみて、福田保育所に来ることが出来て、先生方、そして、子どもたちに出会えてよかったと強く感じました。主活動の後、一緒に給食を食べ、お別れときには、素敵なプレゼントをいただきました。福田保育所で活動した時間は、ほんとうに短い時間でしたが、とても濃い時間を過ごすことが出来ました。

今回のボランティアを振り返って思ったことは、「震災はまだ終わっていない。まだまだこれからである。」ということです。私は、このことを出来るだけ多くの人に伝えて、少しでも多くの方が、被災地のことを想ってくれればいいと思います。そして、ボランティアを終

えて、人との出会いの大切さを知りました。今回ボランティアで出会った方々とは、もう会えないかもしれませんが、でも、どこかでつながっていると感じています。それは、短い時間の中でも、その人と真剣に向き合おうと

したからなのだと思います。ボランティアを通して、人との出会いの大切さを知ることができ、また、人とのつながりというものを感ずることが出来ました。

ボランティアを振り返って

学籍番号：26D16 氏名：川口 茉耶

私は今回初めて東日本大震災の被災地ボランティアに参加させていただきました。1日目には4時間新幹線に乗り、大変でしたがその中にも素敵な出会いがありました。北海道に行くという小学生の男の子とそのご両親と関わる事ができ、暖かい気持ちになることができました。仙台駅についてからがん小屋仮設住宅を訪ね松本さんにお話を伺いました。被災地の現状や、亡くなった方の人数について、さらに公には出ているものの実際とは異なることなど、様々なこととお伺いしました。私が一番衝撃的だったことは、死者の人数についてでした。直接死、間接死、死亡届等、と新聞には書かれ発表されています。一見さりと流してしまいそうなことですが、この3つそれぞれに大きな意味を持ち、一つひとつ死因が違う、ということを知りました。さらにこれは現在では福島民報という私たちが言う中日新聞で発表されているため、なかなか愛知県にいる私たちの目には届きにくいのです。報道されていない現実にはショックを隠せませんでした。お話を伺ったあとは街並みを紹介してくださいました。正直なところ、がれきなどは撤去されており、本当に津波が個々を襲ったのかと疑問になってしまうほど、周りは更地になっていました。町は思ったよりも復興されていて、新しい住居や線路があるなか、一方でガラスが割れていたり家の一部が削られていたり、津波の跡が残るところもありました。私は現在あまり報道されていない街並みが気になっていたのも、自分の目で見て、肌で感ずることができて良かったです。

2日目、3日目はがん小屋の子どもたちと関わったり、チームパティシエもお世話になっている茶話会に参加したりしました。がん小屋の子どもたちは元気でバスケットボールをしたり野球をしたりと私たち1、2年生も本気で遊びました。本気で遊ぶことができ、とても楽しく関わる事ができました。茶話会ではお年寄りの方とも交流し、様々なお話を伺いました。私たちが企画し

たミニコンサートも楽しんでくださり、大きな声で歌っている姿を見て、心が温くなりました。また茶話会のあとには夏祭りも行いました。先生方も手伝ってくださり、夏休み中に準備していたことが発揮できたので良かったです。現在仮設住宅に住んでいる方だけでなく、周りに住んでいる方、以前住んでいた方などが来てくださり大盛り上がりになりました。気さくに関わっていただけなのですぐに仲良くなる事ができ、良い経験となりました。さらに夏祭りの買い出しで様々なお店に行ったとき、お茶を出してくれたり、来てくれてありがとうとおっしゃっていたりと、東北の方々の温かさを感じました。最終日には以前からボランティアでお世話になっているふじ幼稚園に行きました。私たちの企画としてシャボン玉と水遊びを行いました。みんな楽しそうに遊んでいて、私たちも準備をしてきてよかったと、うれしくなりました。ここである女の子が水遊びのときに、ひまわりにお水をあげていてその場についていました。大きくなるといいね、そう声をかけたら女の子は「ビッグスマイルになあれ」と言っていました。ビッグスマイルとは、ふじ幼稚園が震災にあったときに亡くなった子どもの保護者の方がその子にちなんで言葉だったのです。震災当時、ふじ幼稚園に入園していなかった子どもがこのような言っていたので、本当に大切にしている言葉だ、と改めて感ずることができました。お昼からは園長先生に震災当時のお話を伺いました。写真を見せてくださり、同時に当時のことが鮮明にわかるようなお話もしていただきました。昨年の報告会で聞いていたのですが、実際に被災した園長先生からお話を伺いし、涙が止まりませんでした。先生方のとっさの判断、私がある立場だったらできるのだろうか。そう考えるとその時その場にいた先生方がどんなにすばらしい先生方だったのか思い知らされます。ここで感じた思いを大切に私は今後子どもたちと関わっていこうと思います。そして、ふじ幼

稚園の先生方のように私も子どもたちのことを第一に考えることができるような先生になります。そしてまた奇跡の再開をしました。1日目に新幹線であった親子にまた、帰りの新幹線で会いました。同じ日に同じ時刻で同じ車両に乗ったこと。奇跡の連続で驚き。また会えたこ

とに嬉しく思いました。私は今回のボランティアで人との出会いの素晴らしさを感じました。被災して悲しい思いを抱きながらも、前に進もうとしている姿を実際にみることができてよかったです。このボランティアで得た思いは一生これから先忘れません。

震災を風化させないために

学籍番号：26D19 氏名：倉本 美希

昨年に引き続き、今年も東日本大震災復興支援ボランティアに参加しました。今年は参加希望の学生が多く、参加できる人数が約15名に対し希望者が30名近くいました。私は去年参加したので、まだ行ったことのない方が参加したほうが良いのではないかと考えており、今年も参加するかどうかでとても迷っていました。しかし、昨年と比べてどのくらい復興しているのか、被災者の方々の気持ちに変化はあるのか、また直接現地をみて学びたい、学生のうちにもう1度参加し被災者に笑顔届けられる活動をしたい、少しでも役に立てることがしたいという思いがあり、参加に至りました。

1日目は、被災地巡礼をさせていただきました。昨年は山積みのがれき、たくさんの重機、曲がったガードレールや電柱を多く目にしましたが、今年は物が減ってさっぱりしていました。だいぶ復興が進んでいると感じました。特に大戸浜高台は緑が広がっていて大きく変化していて驚きました。去年の巡礼ではいかなかった埵浜慰霊碑をみて、地震や津波でなくなった方々への供養も出来始めていることがわかりました。巡礼の時、雨が降っていたので外に出てみるのが出来ない場所もありましたが放射線量計や工事中の線路もみることができ、復興の様子がよくわかりました。また、現地案内をしてくださった松本さんのお話の中でも、復興の様子が伝わりました。支援プログラムについてのお話を伺い、東北全体で行っていたプログラムが今は福島県とふじ幼稚園しか行わずに済んでいるということがわかりました。

しかし見えるところの復興は進んでも、見えないところの復興は充分に進んでないこともわかりました。自殺者が後を絶たない話や行方不明者の死亡届を出さざるを得なくなっている話で胸が痛む場面もありました。ボランティアで被災地へ行く人は支援の形をだんだんと変

えていく必要があると思いました。

2日目、がん小屋仮設住宅へ行き、仮設住宅に住んでいる子どもたちと遊ぼう会と宿題やろう会を行いました。小学生の子が多く、始めは照れくさいせいか声をかけても反応がなかったですが、外でバスケやボード、野球、鬼ごっこ、室内でカードゲームや宿題をやっているうちに緊張も解れ、子どもたちと楽しく過ごすことができました。子どもたちが笑顔で遊んでいる姿をみて、嬉しい気持ちになりました。

3日目は、午前中は茶話会に参加し、午後は夏祭りを開きました。夜には花火大会をして、とても充分した一日でした。茶話会ではがん小屋仮設住宅やその周辺に住んでいらっしゃる高齢者の方々とミニコンサートを通して歌を歌ったり、コーヒーを飲みながら話をしました。わたしは90歳の男性の方と水曜喫茶のママをやっている方と特にお話をしました。去年は震災当時の話題が中心でしたが、今年は違いました。90歳の方とは今の暮らしの話や、昔東京で働いていた時の話、ミニコンサートで歌った歌についての話、震災当時津波がきて逃げた時の様子の話を少し伺いました。90歳には見えないとても元気な方で、あっという間に時間が過ぎてしまいました。茶話会のママとはケーキボランティアについての話をたくさんしました。「いつもケーキをありがとう。」「パウンドケーキが美味しいから特に嬉しい。」「ひとつひとつのラッピングやメッセージカードを見るが楽しみ。」そんな声をいただけてとても嬉しくなりました。今年は初めて夏祭りを開き、屋台も出して楽しい企画をすることができてよかったです。夏祭りの時、わたしは音楽とダンスの係りで祭りの始まりとスイカ割りの始まりです。ダンスを考えてありましたが、小学生の子はなかなか踊ってくれず、無理に取り入れなくてもよかったと少し後悔が残りました。3泊4日で短い期間なので、

もっと吟味して考えるべきでしたが、最終的に子どもたちが祭りを楽しんでくれていたようだったのでよかったです。花火大会では用意していた花火がすぐなくなってしまったのですが、祭りに来ていた子どものお母さんが追加で花火を下さり 東北の方々の暖かさにも触れることができました。

最終日は福田幼稚園を訪問し、保育に参加させていただいて、用意していったシャボン玉遊びをしました。子どもと一緒に給食をいただいたり、ボランティアとい

うより、とても勉強になりました。

今年もボランティアに参加することができ、本当によい経験になりました。昨年より復興の進みを感じられたこと、それでも関連自殺をする方がいらっしゃることに、そして仮設住宅や保育園の子どもの様子をたくさんの人に知ってもらって、東日本大震災で起こったことを風化させないために自分にできることをやっていきたいです。

テレビの画面ではわからないこと

学籍番号: 26D24 氏名: 篠宮 利佳

1日目は被災地に行きました。ふじ幼稚園にいった際に、亡くなった子どもと先生の人数分の風車がたててありました。風に吹かれてゆっくりと回ったり、まわらなかつたりしている様子をみていると亡くなった子どもや風車を立てた園長先生の思いが伝わってくるようでした。また、テレビで見た津波の様子を、実際に現場に行くことで震災についてより実感がわきました。

2日目はがん小屋の子どもたちと遊びました。震災によって元気を奪われているのではないかなどたくさん考え、会う時には緊張しました。しかし、実際はとても元気で笑顔で遊んでいました。一緒に野球をし、思い切り走りました。



3日目の午前是水曜喫茶に参加させていただきました。子どもだけではなく高齢者など幅広い年代の方々とお話をすることができました。仮設住宅での暮らしや、精神面への影響など震災を経験した方からしか聞くことができない話を聞けました。午後はボランティア主催の夏祭りをやりました。喜んでくださったことがなにより嬉しく思いました。

4日目はふじ幼稚園に行き、子どもたちとシャボン玉をしました。また、園長先生から3月11日になにがあり、どのような過程を経て現在に至るのかを聞きました。子どもたちも不安の中、保育者が元気で笑顔で接し乗り越えてきたというお話を伺い、とても感動しました。また保育者としての役割を再確認することができました。子どものことを第一に考えてきた先生がたのお話はとても心に響きました。

四日間という短い間でしたが、たくさんの方と関わり、お話をすることができました。震災というのはテレビの画面だけでは分からないことばかりでした。実際に現場に行き、仮設住宅を見て、そこに住んでいる方と関わって初めて知ることがたくさんありました。このような経験をさせてくださった方々すべてに感謝し、少しでも震災の現状を知ってもらうため、伝えて行きたいと思っています。

今の生活を大切にしつつ

学籍番号：26D42 氏名：水野 乃里花

私は今回初めて東北ボランティアに参加しました。2011年3月11日に東日本大震災が起きましたが、4年経った今、被災地はどうなっているのか何も想像ができないまま東北へ向かいました。到着してすぐに、雁小屋仮設住宅で、松本普さんのお話を聞きました。私は、地震で亡くなった方の半数は津波で亡くなったと思っておりましたが、実際は「関連死」によって命を失う方が多いことを知りました。その中には自殺も含まれます。地震や津波で亡くなっている人も多し中、辛くて自ら命を絶つ人の思いを想像すると胸が痛く、いたたまれない気持ちになりました。

松本さんのお話を聞いた後、巡礼に行きました。巡礼では、慰霊碑のある墓地と海の近くの高台に行きました。墓地では、私たちが来る前のお盆で遺族の方がお花を備えに来ていました。以前までは、お墓が作れず、お盆すらお墓参りができない状況だったそうです。私たちは、お盆に家族で祖母や祖父のお墓参りに行くことは当たり前になっていますが、遺体が見つからない方がたくさんおり、お墓参りがしたくてもできず、お盆のたびに辛い思いをしていると知りました。お墓参りがまだできていない家庭が今でも多くあると知り、当たり前に行っていることひとつひとつが大切にしていかなければいけないと思いました。

海の近くの高台では、以前は漁業が栄えており、住宅がたくさんありました。震災後は、津波で全ての家のみこまれ、巡礼に行った際は住宅は一つもありませんでした。ですが、復興は去年よりも進んでいると聞きました。今は、瓦礫はそこはほとんどなく、堤防が徐々に作られていました。堤防があることによって被害は少なくなると知り、この堤防がこれから少しでも多くの方を助けられればと願いました。

最終日は、各メンバーそれぞれ分かれて保育所や幼稚園に行きました。私は、ふじ幼稚園に行きました。ふじ幼稚園は、当時津波の被害を受けました。旧園舎を見た時、津波の跡がそのまま残っており、津波は一瞬にし

て幸せな保育現場を奪ったのだと実感しました。その旧園舎を見た後にふじ幼稚園を訪れました。現園舎はどうなっているのだろうという気持ちを持ちながら行きました。現園舎のふじ幼稚園を訪れた際、のびのびと子どもたちが遊べる園庭や、木造で落ち着いて生活できるような園舎や、笑顔で迎えてくださった先生方がありました。子どもたちは、このふじ幼稚園で安心して生活できているのだと思いました。

ふじ幼稚園での私たちの活動は、シャボン玉遊びと水鉄砲です。曇りだったので少し肌寒い気もしましたが、特大のシャボン玉を作ったり、ストローで小さなシャボン玉を作ったり、うちわでシャボン玉を一気にたくさん作ったり、ペットボトルの水鉄砲で木に水をあげたり、園庭にキャラクターの絵を描いたりしました。

ふじ幼稚園は、震災後に「笑顔広がれプロジェクト」という活動をはじめ、ひまわりの種から花を育てて震災後の悲しみの中でたくさんの笑顔を広げようという活動に取り組んでいます。園庭で水鉄砲を使って絵を描いている時に、1人の子からひまわりの絵を描いてと頼まれました。一緒にひまわりの絵を描いて完成すると、そのひまわりの絵を見て「これ、ビッグビッグスマイルだね」と言っているのを聞いて、涙が出そうになりました。子どもたちの中にも、震災があったということがあってその出来事を大切にしているのだと感じた場面でした。

園長先生から、当時の様子をうかがい、絵本を読んでもらって涙が止まりませんでした。このような現状があるということを私たちは理解しておくこと、時間が経つと私たちの中では薄れていってしまうことが被災者の方にとっては一生消えないということを知っておくこと、そして私たちも薄れさせないようにすることが必要だと感じました。

私は、このボランティアに参加して普通に生活できている今がどれだけ幸せかということを再確認できました。今の生活を大切にしつつこの経験を私たちの周りに伝えていかなければと思いました。

ボランティアを振り返って

学籍番号：27B04 氏名：岩園 明音

8月17日～20日の4日間、私たちは東日本大震災復興支援ボランティアにいきました。私が今回の活動に参加した理由は、今までの4年間、東北の人の為に何かしたいと思うものの、具体的に直接関わるといったことはしたことがなかったからです。それに、名古屋に戻ってから身近な人だけでなくたくさんの人に被災地の現状を自分の経験から伝えたかったからです。実際に津波の被害に遭った地域を巡礼しました。津波が来ると警報を聞いた人達が逃げた高い丘にも登りました。そこから見えた景色は、はっきり言って何もありません。あるものと言えば、積まれた土、それを運ぶショベルカーのようなもの、そして緑が生い茂っているだけでした。そこに民家や町があったことは想像できませんでした。そこには新しく電車が開通する計画や防波堤が作られるようですが、私達が訪れた新地町の復興はそれでもまだ途中でした。一部瓦礫があったり、当時のまま手を付けられていない家、ガードレールが曲がった箇所もありました。海拔〇mという表示や、津波到達区域ここから、ここまで、といった表示をいくつか見つけ、津波の恐ろしさを改めて感じました。

私達が2日目に訪れたのは同じ新地町にあるがん小屋という仮設住宅で、そこには小さい子どもから高齢の方まで年齢層がばらばらで笑いが溢れる元気な方達が生活していました。子ども達を集め、夏休みの宿題を持ってきたり、外で思いっきり遊んだり、室内でカードゲームなど、私達も一緒に楽しむことができました。子ども達は本当に元気いっぱい私達が元気を貰うほどでした。

3日目には1日びっしりのスケジュールで、毎週水曜日に行われている水曜喫茶、茶話会に参加させていただき、柳城生からミニコンサートを行いました。茶話会は高齢の方が多く、年代に合わせた曲と一緒に歌ったり、お話をしたりと、短い間でしたが関わりを持つことができて楽しんできたと思います。午後は夏祭りで柳城生がそれぞれ用意した屋台を出し、私はカキ氷を担当しました。たくさん笑顔を見ることが出来て良かったです。夜は花火大会を行いました。子ども達はとても楽しみに待っていてくれました。あんなに楽しんできたならもっと用意してもよかったと思います。2日間楽しく過ごせた分、別れも辛く感じる事もあり、これから先も強く大きく育って欲しいと思います。『ありがとうね。頑

張ってね。』という、『顔、忘れないよ。覚えてるからね。元気でね。』と返してくれた子がいました。私にとって、深く、これからも頑張ろうとそう思える言葉でした。

4日目は夏季保育中のふじ幼稚園に訪れ、縦割り保育で設定保育をさせていただきました。まず驚いたのは、初めに園児全員でガラス張りの校舎の周りの廊下でマラソンをすることでした。毎朝するのは、体力づくりなのかなといろんな意味がこめられていると思いました。1年生は実際に保育するのは初めてで、先輩の姿を見ながらですが、子どもの前に立ちました。主活動はシャボン玉で、導入から先輩の行動を目や耳で焼き付けることが出来て、保育の面でも学ぶことが出来ました。手作りの道具で大きなシャボン玉や小さいたくさんシャボン玉もでき、とても楽しそうでした。私は、主活動が終わり、部屋に戻り落ち着かせる為に手遊びの後、歌つきの絵本の担当でした。もう一人の1年生と役割分担をし、私はピアノを弾く担当になりました。もちろん園児の前で弾くのは初めてだし、練習をしていたものの、緊張のあまり間違いを多くしてしまいました。でも、この経験があったからこそ、自分のピアノに対する意欲が低かったなどたくさんの反省から次に活かせると思いました。最後に園児と『ひまわりおやくそく』という歌と一緒に歌いました。とても素敵な曲です。たくさんの人に広げられたらと思います。園児とさようならをした後は、園長先生からの話を伺いました。4年半前にそんなことがあっても今こうして園を続けることが出来ている事はすごいことだと思います。自分がその先生の立場だったら…これからその身を味わうことがあるとしたら…。何があっても子どもの命と笑顔を守り、それから自分の命も守る、そういった覚悟があつてこそ保育者だと今の私には不足している要素の一つだと思います。

この4日間では、ボランティアという活動で私達が勇気と希望を与える立場だと思っていました。もちろん与えられていたらいいなと思います。ですが、反対に学ばせてもらうことやこれからの自分の為であったり、勇気と希望をいただくことができました。この経験が出来たのは柳城が、このような機会を作ってくれたのと、数年の間に先輩方が築き上げてくださった信頼の元で行われているからだだと思います。これからもボランティア活動を続けていって欲しいです。

ボランティアを振り返って

学籍番号：27B05 氏名：宇藤 百合子

1 日目はがん小屋の集会室にて松本さんから被災地の現状について話して頂いた。内容は聖公会が行っている支援活動についてや震災から4年経っての変化。そして今最も必要なのは、自立に繋がる復興を行なわれるべきだということだった。ただその復興遅れているのが現実である。その後、被災地の巡礼をした。平和の礎では亡くなった方のご冥福を祈り、津波が実際に襲った場所にも行き、震災の日いかに恐ろしい事が起きたかを目の当たりにした。最後にふじ幼稚園の旧園舎へ行き、当時幼稚園の園児、先生方が体験した事を教えていただいた。また現在は新しい場所で園を再開されて新しいスタートをしたそうだ。一方、亡くなった園児の保護者の方と先生方による裁判もまだ行なわれており、辞めていった先生も少なくない。帰る前に園の前に置かれているふノートにそれぞれの思いを綴り、亡くなった園児、先生方へ黙祷した。

二日目、午前中はがん小屋の子供達と沢山遊んだ。外では野球をして、中ではカードゲームなどが盛り上がった。勉強を一緒にしていた子たちもいた。午後からは自分はフランクフルト係だった為買い出しに行った。買い出しの先々ではお店の方たちがとても親切だった。野菜や魚はどれも新鮮であった。帰ってから次の日の夏祭りの打ち合わせだった。

三日目は午前は茶話会だった。一緒に歌うことで、とても仲が深まることができた。震災の時の事や今の生活の話しをしていただいた。沢山の方がこれからも茶話会に参加を続ける気持ちと話された。午後二時からは夏祭りだった。天気恵まれ沢山の子が来てくれた。焼きそばは難しいと言われていたが、それぞれが協力したため成功した。食べ物以外にも輪投げやヨーヨーも盛り上がった。花火大会は人数に対して数が少なかったのので今後花火をする場合増やしたほうが良いだろう。

最終日は三つの幼稚園や保育所へお世話になった。自分は新地保育園だった。最初の一時間は外でシャボン玉をした。うちわを使った大きいシャボン玉は子供たちが大興奮だった。自分たちも想像以上の出来で違う機会でも良いのでまたやりたいと思った。その後誕生日会が行われ、先生の進行がとても上手で園児の誰もが先生を見ていた。自分たちは先生方とゲストとして南の島のカメハメハを踊った。練習が直前だけだったので、すごく

緊張したがすごく盛り上がったので楽しめた。お昼ご飯は誕生日会があったのもあるが、可愛いものばかりで食欲がでるようなもばかりだった。おかわりする子も沢山見られた。自分が将来働くならこんな保育所がいいなどおもった。

これらのボランティア活動を通し、まず思ったのが自分たちの知らない事が多かった事である。自分の国で起きたことなのに、ニュースや新聞では語られていない事が多く、もっと学ばなければと感じた。今回学んだことをこれきりにせず、真実を発信していくようにしなければいけないと思う。



東北ボランティアに参加して

学籍番号：27B28 氏名：廣瀬 由衣

8月17日から4日間、東北ボランティアに参加し、多くのことを学ぶことができました。

今までテレビで取り上げられるニュースを見たり、ボランティアに参加した友達の話を聞いたりして、ずっと自分もボランティアに参加したいと思っていました。被災者の方々のお話はどれも、大切な人がいるからこそ他人事だとは思えなかったからです。

死者数、行方不明者数が数字として取り上げられるなか、具体的な内容が取り上げられるのはほんの一握りです。しかし、被災した方々のなかにはそれぞれいろんな想い、いろんな出来事があったと思います。実際に被災地に行き、いろんな人からお話を聞くことで、私自身も震災と向き合い大切な人たちを守れるようになりたい。そんな想いから今回のボランティアに参加しました。

1日目、4年と5か月が経過した被災地を訪れ、私が目にしたのは、ただ漠然となにもない。そんな光景でした。海が近づくにつれて建物が減り、手入れのされていない草原が広がっているのを見て、津波前の写真の場所に自分が立っていることが信じられませんでした。

津波によって失われた。その言葉の意味を実感し、メディアを通してでは伝わらない大きな恐怖を感じました。そして、津波の被害をうけたふじ幼稚園も訪れることができました。今にも子どもたちの笑い声が聞こえてきそうな園のいたるところに、津波の跡が残っているのを見て、先生や子どもたちが経験した恐怖を想像しただけで身体が震えました。

2日目、3日目は仮設住宅を訪れ、現地のお年寄りの方々や子どもたちと触れ合うことができました。

年齢もさまざま、数も少ない、そんな状況で思いっきり遊ぶことができない子どもたちは、少しストレスがたまっているように感じました。それでも子どもたちは元気で、最初は警戒していたようだったけれど、少しすると「一緒に遊ぼう！」と声をかけてくれてとても嬉しかったです。

こんな小さな子どもたちが、なんでこんなに辛い想いをしなければいけなかったのかと思うと心が痛みました。でも、だからこそ子どもたちに負けなくらい自分も前を向かなくてはいけない、と強く思いました。

茶話会で出会ったおばあちゃんは、自分の経験を私に教えてくれました。

津波でたくさんのものを失ったこと。それが戦争をフラッシュバックさせたこと。「大切な人がそばにいて、食べるものが当たり前のようにあって、自分のほしいものに好きにお金を使える。それがどんなに幸せなことか、あなたにわかる？失うことの悲しみをあなたは理解できる？」泣きながら何度もそう訴えるおばあちゃんに、私は手を握り身体をさすることしかできませんでした。

経験した人にしか本当の意味で戦争や震災の怖さを理解し、伝えることはできないのかもしれない。でも、おばあちゃんが私にこの話をしてくれたのは知ってほしかったからだと思います。失うことの恐怖、そして日々の当たり前の幸せに気づいてほしかったからだと思いました。

4日目、被災したふじ幼稚園の新園舎を訪れ、14人の子どもたちと企画した活動を行う時間をいただきました。実習に行ったことのない私には、どんな流れになるのか不安でたくさんのスタートでした。先輩方にアドバイスをもらい、初めて子どもたちの前で手遊びをし、自分の言葉に真剣に耳を傾けてくれる子どもたちを見て、とても勇気をもらいました。

先生や、先輩方の子どもたちとの掛け合いを間近に見ることができ、もっと子どもたちに楽しんでもらえるよう工夫できるところがたくさんあるな、ととても勉強になりました。

そして最後に園長先生のお話を聞くことができました。園長先生のお話を聞いて子どもは本当に真っ直ぐで素直で前を向いて生きていると感じました。

失ったことを悲しむよりも、みんなが見守ってくれている、だから乗り越えなくてはいけない。子どもたちのそんな強い意志に涙が止まりませんでした。

先生たちが命を懸けて助けたからこそ子どもたちも頑張っているんだな、と深い絆を感じました。

いつ地震がきてもおかしくないと言われている東海地方で保育者を目指している私にとって、ふじ幼稚園の先生たちが経験したことは将来の自分に起こることかもしれない、そう思うと今まで以上に大きな不安を感じました。

でもこの貴重な時間を過ごせたことに感謝し、学んだことをいかし、子どもたちの笑顔を守れるような保育者になりたいと思いました。

被災地の現在を伝えたい

学籍番号: 27B33 氏名: 宮崎 菜月

東日本大震災が起こった2011年3月11日から約4年が経った現在、震災当時テレビでみたあの衝撃的な映像は、私の心の中から少しずつ薄れてきているように感じる。現在の東北はどうなっているのだろうか。期待と不安の入り混じった思いで新幹線を乗り継ぎ福島県へ向かった。

一日目は、福島県新地町の巡礼をした。津波が来たとき町に住む人が逃げた小高い山、そこに逃げ津波が押し寄せる。そんな状況をみた福島の方々はどんな気持ちだったのだろうか。私は実際にその場に立っただけでゾッとした。建設途中の防波堤の向こう側に見えた海はとても穏やかでより一層、私は恐いと感じた。

その日の最後は、ふじ幼稚園の旧園舎を訪れた。園庭には13個の風車があり、それは津波で亡くなった園児の人数だということをお聞きした。また、私たちの頭上を越える高さまで津波が押し寄せてきていたということを知り、実際にそんな状況になったらどうすれば子どもたちを守れるのか、とても不安に思ったのと同時にもっと地震や津波などの緊急の時のことについて考えなければならぬという気持ちが以前にも増して強くなった。

二日目は、がん小屋仮設住宅の子どもたちと外でバスケットボールや鬼ごっこ、部屋の中で、カードゲームなどをして遊んだ。仮設住宅に住んでいる子どもの人数は夏休みだったということもあると思うが、私が予想していたより少なかった。それは一見、人数が減り、復興しているように感じるが4年経った今もまだ、仮設住宅で暮らしている家族がいるという意味なので、私はとても心苦しい気持ちになった。

夕方になり帰るときに、子どもたちが最後まで手を振って、夏祭りを楽しみと言ってくれてとても嬉しく思い、明日楽しんでもらえるように準備を頑張ろうと思った。

三日目は、午前に茶話会、午後から夏祭りをした。茶話会の前に夏祭りの屋台の仕込みをした。そのため茶話会には途中からの参加となってしまったが、お年寄りの方々と歌を歌ったり、お話をしたりした。歌を歌っているときに茶話会のママや先輩が涙しているのを見て、私も涙してしまった。

夏祭りでは焼きそばを焼いたり、イベントとしてス

イカ割りなどをした。外だったのですごく暑かったけれど、子どもたちがおいしそうに食べている姿や笑顔で楽しんでいる姿をみていると暑さも吹き飛び、とても嬉しかった。最後に花火をして、がん小屋でのお祭りは終わってしまった。そして、あっという間にお別れするときに来てしまった。悲しそうにしている子がいて、お母さんがその子に「それだけ楽しかったってことじゃない?」と言っているのをみて複雑な気持ちになった。そして必ずまたここに来たいと思った。

最終日は、ふじ幼稚園で子どもたちと一緒にシャボン玉や水鉄砲をした。その活動の前に私は初めて子どもたちの前で手遊びをした。前日に先輩にアドバイスをいただき、夜に部屋で沢山練習をしてのぞんだ。先輩がフォローしてくださりなんとか終えることができた。まだまだ自分に足りないところが沢山みつきりこれからもっと頑張って来年には先輩みたいになりたいと思った。

活動が終わった後に園長先生にお話をお聞きする時間がいただけて、ふじ幼稚園が被災したときの状況やその時の思い出をお聞きした。“いつ地震や津波が起こるかわからない”身をもって経験した園長先生の言葉は重く、将来保育者になるにあたって以前にも増して、深く考えなければならぬと強く思った。



私たちが発信することの大切さ

学籍番号：27C11 氏名：黒岩 菜由

2011年3月11日、午後2時46分。東日本に大きな揺れが襲った。当時、私は中学2年生。学校で授業を受けている最中の出来事でした。私の過ごす岐阜県では、「ちょっと大きな揺れだったなあ…」程度の揺れであったため、いつも通りに帰宅し、テレビの映像を見た時、大きな衝撃を受けたことを私は今でも鮮明に覚えています。その日から毎日流れる津波の映像や、避難している方々の様子をテレビの前で見ていることしかできないもどかしさと無力さを痛感しました。柳城へ入学し、柳城生が毎年東日本復興支援のためにボランティアへ行っていると知り、当時何もできなかった分、今できることをお手伝いしたいと思い参加を決めました。

1日目はオリエンテーションを受けた後、被災地巡礼を行いました。様々な場所で震災直後の写真や避難の様子を交えたお話を聞き、とても心が痛みました。中でも私の心の中で強く印象に残っているのが、旧ふじ幼稚園の園舎です。当時、先生方は園舎に津波が押し寄せてきた際、園バスの中にいる子どもたちを懸命にバスの屋根に上げ、怖がる子供たちを安心させるため常に声をかけ、歌を歌いながら一晩を過ごしたと聞き、私は衝撃を受けました。私だったらできたでしょうか、子どもの命を守れたでしょうか。考えれば考える程、保育者という職業の大変さと責任の重さ改めて実感しました。

2日目は、がん小屋仮設住宅へ行きました。「仮設住宅は長く住むことを想定して建てられたものではないから、住んでいる方々のストレスは大きい」と1日目のオリエンテーションで聞いていたので、子ども達に会うまで、不安でいっぱいでした。しかし、子どもたちの笑顔と元気いっぱいに遊ぶ姿は私の不安を全て吹き飛ばしてくれました。仮設住宅に住む子どもたちは、年齢に関係なく皆で仲良く遊ぶことができるキラキラ笑顔の子ども達でした。こんな子ども達も震災を経験し、怖い思いをしたのだと思うと、とても胸が痛みます。しかし、今こうして笑ってみんなで遊んでいること、見守っていてくれる家族や地域の方々がいるということは、小さな一歩かもしれませんが、復興への光なのではないかとも感じました。

3日目には、茶話会の時間をいただき、ミニコンサートを行いました。事前に茶話会に参加される方々と一緒に楽しめるようCDを準備し、途中お話する時間も設

けながら進めました。仮設住宅での生活、普段の茶話会の様子、お孫さんのお話など震災を体験した方の生のお話を聞くことができ、とても貴重な時間となりました。また、私たちと茶話会に参加していらっしゃる方々みなで歌を歌い、短い時間ではありましたが、歌を通してとても距離を縮めることができ、自然と温かい気持ちになりました。茶話会が終わるといよいよ最大のイベント柳城主催の夏祭りです。この日のために一から計画し、準備を進めてきました。ヨーヨーを作って遊ぶ子、かき氷や焼きそばを食べる子、お団子を作る子など皆とても素敵な笑顔を見せてくれ、夏祭りをやってよかったと心から思えた瞬間でした。この日の夜には花火大会も行いました。決して花火は多くありませんでしたが、楽しむ子どもたちの姿、優しさに触れることができました。楽しかった1日が終わり、「僕、忘れないからね!」と声を掛けてくれたとき、私は嬉しさ、達成感、そして心から感謝の気持ちでいっぱいになりました。がん小屋での2日間は、人の温かさに多く触れ、ボランティアへ行った私がたくさんの元気をもらいました。

最終日には、ふじ幼稚園での夏期保育に参加させていただきました。午前中は、シャボン玉を中心とした保育を行い、ふじ幼稚園の子ども達と一緒にシャボン玉を楽しみました。私は、初めて子ども達の前で絵本を読み、とても緊張しましたが、先輩、先生からいただいたアドバイスを思い出しながら読むことができました。最後に子ども達が拍手をくれた時、読み聞かせをして良かったと感じました。昼食後、午後からは、ふじ幼稚園の園長先生から震災時のお話を聞きました。丁度、『笑顔広がりプロジェクト』の一員として活動していらっしゃる、津波により子どもを亡くされたお母さんが幼稚園にいらっしゃり、短い時間ではありましたが、お話を伺うことができました。今回初めて保育という視点から震災のお話を聞くことができ、子どもを守るということ、保育者は子どもの命を預かるということを改めて強く感じました。

私は今回のボランティアに参加し、被災地の、そして被災地に住む子ども達の今を知ることができました。東日本大震災が風化しつつある今日、私たちは学んだことや実際に見てきたことを、どんな些細なことであっても発信しなければなりません。発信する規模は小さいか

もしもですが、テレビも新聞も通さない本当の被災地の今を一人でも多くの人に知ってもらえたらと思います。そして、震災に遭われたすべての方々が、今よりも少しでも幸せな生活が送れるよう活動を継続していかな

ければならないと感じました。チーム・パティシエを通じての活動をこれからも続けるとともに、ぜひ来年もボランティアに参加したいと強く願っています。

ボランティアにあたって私が思うこと

学籍番号：27C19 氏名：田中 美帆

私は、今までテレビの画面を通してしか被災地の様子をみたことがありませんでした。なので、今はどのようなになっているのか、そして、たくさんの方と関わり生

の声を聞き少しでも役に立ちたいという思いから参加に応募することを決めました。

参加することが決まり、嬉しい反面不安な気持ちになりました。どのように接すれば良いのだろうか、受け入れて下さるだろうかと思ったからです。ですが、茶話会や夏祭りなどの準備が進んでいき不安な気持ちが取れました。そして、次にどのようにしたらと、様々なことについて考えるようになり、試行錯誤しながら当日を迎えることになりました。

仙台駅に着き、あたりを見渡すとビルやショッピングモールなどが立ち並びここで震災が起きたのかと、驚き、復興が進んでいるのだなあと感じました。ですが、それは間違いでした。駅から離れると、窓ガラスが割れ、柱が曲がっている学校や、線路工事、海から近くに土が盛られたままになっているところがありました。そこには雑草が生えていました。そのことから私は長い時間、手を加えていないと感じました。あまりニュースに取り上げられていなかったことから、ある程度復興が進んでいるだろうと勝手に思い込んでいました。私のように思っている方も中にはいると思います。メディアは現状、事実など伝えることで私たちがすべきことが見えてくるのではないかと思います。

オリエンテーションで松本さんが、「家を建てるときに関わる公共事業が入札不調になっています。なぜなら、事業がないからです。それは東京オリンピックがあるからです。そして、オリンピックを日本で開催することであの震災から復興したのだよと言っていると思う。」と仰っていました。私は、実際に現地で起きていることを初めて知り、生の声を聞きました。そこから私が思ったことがあります。どちらも日本で起きていることにも

かわらず、なぜ違いがあるのかということです。政治や国際関係について詳しくはわかりませんが、同じ国に住み苦しい思いをしている方々がいらっしゃるのに…と感じました。

当時、中学2年生だった私は、震災の様子をテレビで見て、率直にすごいことが起こったと感じませんでした。ですが、月日が経ち、被災地ではこのようなことが起こっていたということ、たくさんの思いをして暮らしていたということなどを知りました。私たちが普段、普通に生活できることの幸せに気づきました。人が感じる幸せは1人ひとり違うため一概には言えませんが、少なくとも不自由な生活をしていないでしょう。震災を経験し、ずっとその場所にいるからわかること、人が感じる思いは見て、聞かないと本当のことがわからないと思いました。また、私たちが住む地域に大地震（何海トラフ）が起こればすでに予想されています。家庭での対策として、避難経路や避難場所の確認、非常食、家族と離れた場所で起きたときに集まる場所を話し合っておくなど、緊急時にすぐに動ける態勢を整える必要があると改めて強く思いました。学校での対策は、避難訓練を真剣に行うということです。大抵の生徒が軽い気持ちで行っていると思います。今は、何もないですが、もしものためにと最悪なことも考えて避難訓練を大切にすべきだと思いました。

そして、私たちは、この東日本大震災を忘れず、伝えることが最も大切であると感じました。そのためにも、被災地の状況を知り、発信していかなければならないと思いました。

ボランティアを振り返って

学籍番号：27C22 氏名：中村 努

私は、今年の夏休み3泊4日で東北復興ボランティアに参加して東日本大震災から4年を迎えた福島県に行ってきました。

1日目、仙台駅の活気に驚かされつつ車で仮設住宅へむかい、オリエンテーションを行いました。センター新地の方から現地の現状やこれから国や県が行おうとしている施策について説明を受けました。話しのなかで、オリンピックの開催の影響で資材が少なくなっていて復興も遅れているということを聞き国の方針に疑問を抱きました。

その後被災地巡礼として、復興途中の各所をまわりました。津波で押し流された住宅街や、慰霊碑など震災前後の写真と比べると、今見ている風景を疑いたくなりました。写真に確かに写っている建物はそこになく、工事車両と堤防工事の土山が目前にありました。また被災した幼稚園では自分の身長よりも高いところに津波がきた痕跡があり、ここでは先生方の懸命の救出のこと、避難した場所で子どもを励ますために歌を歌い続けたこと、花壇に立てられている風車のことなど、とても想像しきれないようなことがこの場所で起こっていたことの話を聞き、自分が目指している「保育者」とはどれほど覚悟がいるのかということを考え直すきっかけとなりました。

2日目、3日目はがん小屋仮設住宅での活動になりました。2日目は仮設住宅で暮らす子どもたちと全力で遊びました。はじめは3人ほどしかいませんでしたが、笑い声に誘われてだんだん出てきて、野球や鬼ごっこなど、大人数で走りまわりました。最初は見ていただけだった子も次第に参加して笑顔を見せてくれました。午後からは午前中よりもたくさん子どもたちが集まってくれて走り回ったり、一緒に宿題をしたりしました。子どもたちのみせる笑顔はとても輝いていて、震災を体験していると思うとその笑顔がいつそう眩しく思えました。また、仮設住宅に住んでいる方から震災当日のことや仮設住宅での生活の苦勞のことを聞かせていただきました。

3日目は午前中に茶話会、午後には夏祭りを企画しました。

茶話会ではお茶だしの手伝いや用意した歌と一緒に歌ったりしながらお話をしたりしました。

震災により人同士の交流が減り居場所がなくなつたと考える人も多いらしく仮設住宅を出られた方も茶話会に足を運び、会話を楽しむ方がたくさんおられました。そこで行ったミニコンサートは手をつないだり、向かい合い一緒に笑ったりして人の輪の温かみを感じました。

夏祭りは、テントや鍋など必要な物を貸していただきボランティアで来ているはずの私たちが支えられて行うことができ、ありがたいなと思いました。

たった2日のがん小屋での活動でしたが、名前を覚えてくれていたり、「また来てね」と言ってもらえとてもうれしくお別れが寂しくなりました。

4日目は公立の保育所である新地保育所に行き、シャボン玉遊びと、誕生日会のダンスをさせていただきました。また、震災後の保育所のことを教えていただきました。津波と原発事故放射能汚染により園庭に出ることができず子どもたちも言葉にはしないだけで大人よりもストレスを感じていて、子どもは大人の事情がわかって言わないんですという所長さんの言葉に頷くことしかできませんでした。また、立派な保育者となってくださいとエールをいただきもっと自分でできることはやっていこうと思いました。

このボランティアの4日間に参加し学んだことは、まだ被災地の復興作業は終わりがみえていないこと、そしてその事実をみんなが忘れないように私たちが伝えていかなければならないことです。また物事を広い視野で見ても行動や考えることをして行かなくてはならないことを学びました。この4日間のことを忘れることなく保育者になる学びを続けていきたいです。



ボランティアを振り返って

学籍番号：27D18 氏名：田口 希美

私は今回この東北ボランティアに参加し、多くのことを学ぶことができました。そして、4日間という短い期間の中で震災から4年が経った現在の被災地の様子を実際に自分の目で確認し、大切なことは一体何なのだろうということに改めて気付くことができました。

1日目は現地に到着後、センターしんち・がん小屋へ行き、そこで松本普さんによる震災のお話を兼ねたオリエンテーションが行われました。震災当日のことや今の被災地の現状、放射線による様々な影響、復興支援などのことについて詳しく伺うことができました。お話はどれも心に残る内容ばかりでしたが、その中でも私が特に印象に残っている内容は震災や津波等で命を落とされた人数は非常に多く、中には未だに行方不明の方もみえるということです。もちろん震災や津波の影響で命を落とされた方の多さにも驚きましたが、行方不明の方の人数も約200人と多くとても衝撃を受けました。1日も早く残りの行方不明の方が全員見つかって欲しいと思いました。オリエンテーション後は被災地の一部の場所に巡礼に訪れました。震災前の姿と現在の姿を自分の目で実際に確かめて、どれほど残酷な出来事だったのかということに改めて知ることができました。特にふじ幼稚園の旧園舎を訪れた時は、子どもたちや先生方がどれだけ恐ろしい体験をしたのかということ建物物が物語っていました。ふじ幼稚園では園児が9名、職員が2名命を落とされたというお話も伺いましたが、全員の命を守り切ることができなかったということが生き残った園児や職員にとってどれほど辛いことであり悲しいことなのかということを学びました。1日目から震災のことについて学び直す良い時間となりました。

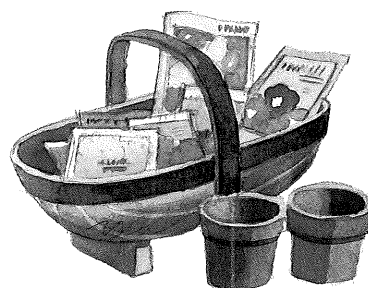
2日目は、がん小屋に住んでいる子ども達と外で一緒に遊びました。みんなとても元気で、私たちが子ども達から元気をたくさんもらうほどでした。私は子ども達と遊んでいて、被災地の人々が震災に負けず笑顔や元気を取り戻しているのは、きっと子ども達のパワーのお陰でもあるのだろうと感じました。そして、これからも笑顔を絶やさずさらに活発な街になっていってほしいなと思いました。

3日目は、午前中は水曜喫茶ということでたくさんのご年配の方ががん小屋に集まってくださり、一緒にお菓子を食べながらゆっくりとした時間を過ごしました。

また私たちが準備したミニコンサートも催し、大変盛り上がりました。この水曜喫茶のようにお互いの会話が自由にできる機会がとても幸せに感じました。午後は、夏祭りを行いました。夏祭りにはがん小屋に住んでいる方以外にも多くの方が来てくださり、色々大変なこともありましたが来てくださった方にも最後まで楽しんでもらうことができとても良かったです。もし来年もボランティアに参加するとなった時は、また夏祭りを催したいと思いました。

4日目は、私は福田保育所に訪れ子ども達とシャボン玉で一緒に遊び、短い時間でたくさん子ども達と触れ合うことができました。1クラス約15人と人数はとても少なかったのですが全員とても仲が良く元気に過ごしていました。子ども達と触れ合っていて自然に笑顔になってしまう程、素敵な笑顔を全員見せてくれました。シャボン玉もとても喜んでくれたので凄く嬉しかったです。最後には心に残る手作りのプレゼントを私達学生と先生1人ずつに準備していただき思い出に残るとても貴重な時間になりました。

今回の東北ボランティアに参加し、被災地のことを改めて学ぶこともできましたが、なによりも人との関わりの素晴らしさに気付くことができました。私達が東北の方に勇気を与えることができたと同時に私達も東北の方にたくさんの勇気と笑顔をいただきました。震災から4年が経った今、まだまだ東北には復興支援が必要不可欠です。私は、今回の東北ボランティアを機にこれからも支援し続けていきたいです。このボランティアに参加することができて本当に良かったです。来年も機会があれば是非参加したいと考えています。最後にボランティア活動に協力して下さった先生方をはじめとする全ての方に感謝しています。本当にありがとうございました。



チーム・パティシエ

学籍番号：26D06 氏名：伊藤 幸穂

学籍番号：26D30 氏名：寺本 朱里

学籍番号：26A40 氏名：堀江 彩花

私達「チーム・パティシエ」は、東日本大震災で被災された方々へ毎月手作りケーキを送る活動をしています。その活動では、パウンドケーキやクッキーなどの焼き菓子を作っています。毎月季節に合わせたレシピや、旬の食材を交えてバリエーションを変えながらメニューを考えています。

「チーム・パティシエ」のメンバーには東日本大震災の被災地ボランティアに参加した学生も多いです。現地で実際に見たこと、聞いたことを参考にメニューを考え、現地の方々とメッセージカードやハガキを通して交流を継続的に続けています。現地の方々の言葉に耳を傾けることで、お菓子が出される茶話会の雰囲気や生の声を感じることができます。今までに被災地に送ったものは、はちみつやチョコ、さつまいもなどのパウンドケーキ、クッキーやコーンが入ったパンなどを作りました。毎回のレシピは各自調べて話し合いをしながら決めています。その中で腐るものは入っていないなどとか衛生面などに気を配りながら作っています。

評判の良かったメニューは、りんごのコンポートを混ぜたパウンドケーキです。東北産のりんごを使用したこともあり、現地の方々から送られてくるハガキでも嬉しい感想を多く頂くことができました。感想を頂くこと

で私達もやりがいを感じ、次の活動でも喜んで頂けるものを作りたいと思う意欲に繋げていくことができました。

この活動を柳城生や地域の方々に知って頂くために柳城祭で被災地に送ったものと同じメニューを販売する活動も行い、売り上げは現地への寄付金にしました。併せて、がん小屋仮設住宅の方々が作りたいちごストラップの販売も行いました。パティシエで作ったメニューは、クッキーにメロンパンのような模様をつけたメロンパン風クッキーです。味もプレーン・チョコレート・紅茶の三種類を用意し、好きな味を好きな個数買うことができました。当日は地域の方々と学生にも好評で、午前中に完売しました。子どもたちが買いにきてくれた時には、山本ゼミの学生が育てたひまわりの種を協力して渡しました。この種も被災地の方々から頂いたもので、柳城では毎年このひまわりを育てて柳城祭などで配布しています。このように学内の学生といろいろな所で協力しながらボランティアを続けています。

被災地の方々と直接支援できることは限りがありますが、現地の方々とつながりを大切にして、被災地の方々の気持ちに寄り添う活動していきたいという思いで一人一人がこの活動に参加してきました。



あとがき

宗教委員 菊地 伸二

2011年以来、毎夏行ってきた名古屋柳城短期大学の「東日本大震災復興支援ボランティア」も今回で五回を数えることになった。この度のボランティアは、ここ二年ほど二つの期間に分けて行っていたそのやり方から、16名の学生と5名の教員の総勢21名で、8月17日（月）～20（木）までの一期間で行う形へと変更した。

初日は、名古屋から福島に移動し、がん小屋仮設住宅にあるセンターしんちへ向かい、そこで「オリエンテーション」を受けた後「被災地巡礼」を行った。二日目と三日目は、がん小屋の子どもたちをはじめ、そこに居住する方々、そこに集う方々と時間を共に過ごすプログラムを持った。とくに二日目は、がん小屋の子どもたちとの「遊ぼう会・宿題やろう会」が開かれ、三日目は、がん小屋を舞台に、そこに集まってくる水曜喫茶の方々を対象とした「ミニコンサート」、がん小屋の方々との「夏祭り」「花火大会」が行われた。そして最終日の四日目は、ふじ幼稚園に加えて新地町にある二つの保育所（新地保育所、福田保育所）の三ヶ所に分かれて「保育参加」をさせていただき、そのあと全員が合流して、仙台経由で帰路に向かった。

これまで行ってきた五回の復興支援ボランティアは、必ずしも同じ内容のプログラムを保持してきたわけではない。行先についても、宿泊拠点についても、日時についても、少しずつ変化しながら今回にいたっている。ボランティアを行う度ごとに、そのときどきの現地からの声に可能な限り耳を傾け、わたしたちのできることとすり合わせを行いながら、決めてきた。そしてそのような中で、柳城にとって、ぜひとも関わらせていただきたい、あるいはぜひとも関わらなければならない、そのような場所や相手が次第に浮き彫りになり、それらをいわば中心に据えながら全体のプログラムが形づくられてきた、このように言ってよいであろう。

回を重ねることによって、たしかに一方では段取りなどの点でスムーズに準備ができるようになった面もあるが、他方で、今もお震災や原発のことで多くの苦しみを負っている方々、仮設住宅での生活が長期化している方々等と関わる中で、回を重ねるごとに一層、わたしたちの側に新たな準備が必要になってきていることもたしかなことであり、今回もそのことを強く感じさせられた。

「死者はわたしたちがまったく忘れてしまうまで、本当に死んだのではない」。エリオットのこの言葉は、東日本大震災の中で、あるいはその後の仮設住宅での生活の中でいのちが失われた方々のことを思うときに幾度も頭をよぎった。そして震災から時間が経過するに従い、いよいよ重みを増してくる言葉でもあった。

忘れることによって、自分たちの記憶から消失することによって、新たに生まれてくる苦しみや痛みがあることを、この言葉はわたしたちに告げているようでもあった。

共に分かち合い、共に生きることを求めるボランティアの中で、このようなことが起こっていないかどうかを、わたしたちは今一度立ちどまって振り返りながら、これからの柳城の関わり方について考えてみるのが大切なのではないかと感じている。



発行日 2016 年 3 月 16 日
編 集 名古屋柳城短期大学 キリスト教センター（宗教委員会）
発 行 名古屋柳城短期大学
〒466-0034
名古屋市昭和区明月町 2-54
TEL 052-841-2635 (代)
FAX 052-841-2697
印 刷 株式会社 日興商会

